

には臨むべからず、唯淨土の一門のみありて通達すべきの路であると、我が病を省みて早く薬を服すべきである。(十、六、二九)

選擇集の建曆版、建長版及び木活版

藤 堂 祐 範

余は本誌第二號に選擇集の古版本に就て、尠か見聞せし處を開陳せしも、建曆、建長の兩版に就ては、其の當時材料の蒐集完からず、又論文の冗長をも恐れて筆を擱きしも、頃日尠か材料を蒐集し得たるを以て、更に大方の教示を乞ふことゝはなしぬ。

古來本集の出版に就き、元久年間に焼失せられしと云ふ所謂原版を云云する人も、此の原版の出版は疑はしく、元久三年本集の版本版本を焼失せしむべしとの山門よりの申状さへ發見せられず、其の事實さへ疑はるゝ今日、大に有力なる資料の發見せられざる限り、疑問として保留して置くより外なかるべし。

建曆本の出版に就ては、現時其の版本を見ること能はざるも、此の本の出版は疑ぶ餘地なきものなるべし、梶尾明惠上人の摧邪輪及び日蓮の立正安國論、又宗内に於て

は藤田持阿の決疑抄見聞等、何れも建曆開版の事を記述せり、今建曆版の特徴として、記主上人の決疑鈔を初め、元祿頃に至る諸書に散見せる所、略ぼ一致せるを見ては、確に該版の出版は疑ふべからず、而して建曆版の特徴として、其の重なる點は、第四三輩章の引文の初に「無量壽經下云」の六字を置けること、同章私釋段に同類異類の助業を擧ぐる段に、異類助業を擧ぐる標牒「次異類助成者」の六字を置くことにし、此の二點は延應已後の粘葉綴の各本を初め、元祿九年の義山上人開版本に至る已前の諸本、多く此の二點を缺脱せり、此の特徴を知るは決疑鈔三（三五）全書七（七）佛告等者、若準餘篇、應云無量壽經下云、無者略也、故建曆二年開版摺本有此言也、又同鈔三全書七（三五）先就上輩等者、應云次異類助業者、先就上輩等、故或本有此牒文也、と此の文或本と云ふて前文の如く建曆本と云はざるも、記主上人本鈔の述作は建長六年なるを以て、其の已前の開版本としては延應建長の兩版已外になく、延應及び建長の兩版には此の二句なきを以て、勢ひ建曆版を指せることは當然なるべし、次には大谷派の學匠として有名なる惠空の開版本と稱せらるゝ元祿七年の開版本に、平氏の序文（短序）を擧げて、「此序者兵部卿三位平基親之作也、云云建曆二年九月八日開版之本載之」と注し、又其の跋に「斯集現行之印本數板、或有不同者、今因講幸得古本一兩、謂建曆第二最

初印本并延應元年印本之第二之本云云」と云へる。又西山派の學匠竹林寺昌堂が元祿八年に述作せる選擇集校輯要義抄の序に「此集世本錯誤頗衆、頃幸得建曆年中刑部卿三位平基親所序善本、訂正本文、合而刊行、庶學者見之、毋復依未正之本」、又同抄四頁には三輩章引文の初に「無量壽經下云」の六字を加へて「世本皆脫經題、今依建曆本、更加之也」、又同抄四頁に「次異類助成者」の六字を加へて「世本多闕標牒、今依建曆之本、亦更加之」と云へる。又元祿九年義山上人開版本の跋に「建長以後、刊者咸從延應何哉、今欲以建曆本、鍍梓行世」と云へる。皆悉く建曆版に依て註釋又は開版を成せるものにして、其の特徴を擧げたる點も、惠空開版本を除きては皆一致する處なり。惠空が建曆本を校合せりと稱し居るも、其の實如何ならん、本文中には餘り其の跡を見ず。以上鎌倉末より南北朝時代のみならず、降て元祿時代に至る迄建曆版の存在せしことは否定すべからざるも、該本が何の處何の地に所在せしやを擧げざるは惜むべき次第にて、近世知恩院鸞宿僧正の講述と稱する寫本の講録の卷頭に「建曆正本絶版、義山師歎之、久尋建曆正本、偶得其本於三井寺、雀躍鍍梓行世」と、此の記述已外には其の所在を知ると能はざるは遺憾にして、只一縷の望は三井寺經藏中に今も尙存在せる哉否やにして、三井寺は大師在世中其の寺の長吏公胤が淨土決疑抄を著は

して本集を難破せり、此の事は建曆開版已前の出來事に屬するも、公胤が此の難破後大師の訓諭に服し大に悔悟歸敬せし事實よりして、該本が三井寺に所藏せられある事の想像も無理なかるべし、斯は大に今後の搜索に俟つべきなり、已上建曆版の存在を證する資料を列擧するのみ。

建長版

粘葉綴二帖

西本願寺所藏

用紙

上冊泉貨紙雲英引

下冊烏子紙

上冊

豎八寸六分

横五寸一分

下冊

豎八寸五分

横五寸一分

上冊

七十八葉

尾題なし

下冊

五十二葉

首題なく尾題あり

(丁數記入なし實算に依る)

一頁 六行。一行 十七字詰。私釋版十六字詰。

(上冊最終の一葉のみは一行十五字詰なり)

無匡廓無界線 白文

刊記 下冊尾題の次ぎ一行を隔て、本文と同大同體の文字を以て左の刊記三

行あり。

淨土教門解脫詮

今開印板弘流轉

廻施尊儀及群類

順次同生九品蓮

建長三年七月

日願主人阿彌陀佛

此の本は從來單に建長版として大藏會等に展觀せられしと雖ども、今仔細に之を點檢するに上下兩冊全く版式を異にして、全然別種の開版と認むべきものなり、兩冊共に寫經體の豊麗優雅の書體なるも、上冊は稍硬く肉太く、下冊は弱く上冊とは全然別手なり、是れ全く版型別種にして異版を集めたる寄せ本なり、從て用紙も前記の如く其の質を異にし、又上冊には鎌倉末と見ゆる書入あるも下冊には全然是れなし、下冊は建長の刊記あるを以て其の開版時代明了なり、上冊は建長よりは稍遅れたらんも其の近き時代に開版されたるものなる事は其の字體に依りて窺はるべし、而して上冊は其の當時の摺寫なるべきも、下冊は字體磨滅の點より餘程後年の摺寫なるべし、裝幀は後に至りて上下兩冊同様に製本せられたるものにして、背は金襴を以て覆ひ、表紙は紺紙に蓮華蓮葉の金泥模様あり、表紙裏には金銀砂子を施せり。

此の版の文字の缺脱等に就き特徴を擧ぐれば、第一教相章私釋段の「不足疑端但

諸宗立教」の文中但の一字缺脱し、又其の第九行目「準上思之」は唯上思之と成り、同段捨聖歸淨の二由を擧ぐる下「且曇鸞法師」の且は具と成り、第十二附屬章私釋段〔下冊第二十一葉左〕「顯餘書寫供養」の餘の一字他版に缺脱せるも此版には在り、從て次二十二葉右の第五行目は十七字詰となりて他行よりは一字多し、第十六附屬章私釋段の中程「七日華不萎悴即得往生依之七日華果然華不萎黃」と華の字二字他版よりは多し。

已上は版式のみに就て記述せるも、此の西本願寺藏の建長版上冊の書入は、前述の如く鎌倉末期の書體にして恐く本願寺常樂臺開山存覺の筆かと思はる、よし存覺ならずとするも親鸞門流の徒の手になりし事は、上冊末尾の書入に「一義三心ハ諸行念佛ニ廻テ安心ヲ具セン」と註して其の肩書に「他流鎮西」と記入せり、又卷頭の書入に「月輪禪定殿下嚴命元久甲子之春撰献上人入一向專修門事行年四十二云云」と、此の選擇集撰獻は本宗に於ては建久九年と傳へ、此の元久甲子説は拾遺古德傳及西山堯惠の私集抄等の説にして、又開宗を四十二歳とする、共に本宗所傳と異なる所、大に宗史の資料として參考すべきものなるべし。

木活版

下冊一帖零本

東京 鈴木靈眞師藏

製本 粘葉綴 用紙 泉貨紙

豎 六寸六分 横 三寸八分 五十二葉(實算)

首題缺 尾題存 無廓無界 白文

刊記奥書等なし

此の本は零本なるも珍らしき稀觀の書にして、由來淨土宗典籍の活字版は多く縁山活字若くは其の系統に屬するものにして、此の版の如く大字を以て粘葉綴に印刷され、一見春日版、野山版の如き趣きを呈せるものは、今日迄の見聞に於ては斯本一部あるのみなり、而して開摺の年代は刊記なきため明確に知るを得ざるも、先づ元和寛永頃と定めて大差なかるべく、又文字に大小の不同あるは、開摺當時活字の不足よりして補刻せるものにして、斯く齊整を缺ぐに至りしものならん、現存下冊のみの零本にして完本を見ることを得ざるは遺憾の次第なり、卷末に鹽崎村康樂寺と小さく墨書せるは、親鸞門下西佛房開基寺なる信濃國更級郡康樂寺の舊藏本なるべし。

此の版の他版と異なる特徴は、第九四修章第二引文中の「涕唾便痢」は便利と成り、第十三多善根章第二引文の終り「法侶將衣競來着證得不退入三賢」の競は竟に入は人に成り、第十六附屬章私釋版中第二問答の問の「謂弘法寺迦才」は弘決等迦才

と成れる等此の版の特徴なり。

已上建曆版の出版は事實なるべきも、其の現存せるや否やは大に今後の搜索に待つより外なかるべし、建長版の零本なることは最近の發見にして、木活版の零本と共に蓮門の書史學上大に惜むべき事なるを以て、此の三版の完本を發見することは大に宗史宗學に志す者の任務と考へ、尠か三版に就き愚見を陳べ、前々號の缺を補ふ事となせり。

讚 頌 哲 學 (承前)

——(ウイリアム氏印度教第二章)——

前 田 聽 瑞

三種現體

吠陀固有の註釋は屢々三十三神に説き及んでゐるし、梨俱吠陀(一、三、四、一、一及び一、四、五、二)も亦たこの數字を掲げてゐるといふことは注意せねばならない。この數字は印度の宗教的體系の中に常に出てくる聖數即ち三の倍數である。

(原著者註) 聖數三の例は澤山ある。即ち三吠陀、三解脱法(Margas) 三徳(Gunas) 重要なる三階級(Caste) 濕婆(Siva) の額にある三眼、人生の三目的、三界等がそれである。